



“学びの森”だより

育みたい資質・能力の明確化と小学校教育との円滑な接続

幼稚園というのは、ドイツの教育学者フレーベルが創設した「キンダーガルテン」を訳したものです。ガルテンとは、「庭園や花園」のことです。

庭園では、一本一本の草花や木が庭師の丁寧な手入れによって、かわいらしい花を咲かせ、美しい姿を見せてくれます。フレーベルは、**幼児が教育者の適切な援助によって、一人一人の個性に応じて様々な色や形の花を咲かせる庭園である**という願いを「キンダーガルテン」に込めました。

学校教育法には、「学校とは、**幼稚園**、小学校、中学校…大学及び高等専門学校とする。」と記載されています。幼稚園は、高等学校、大学までの教育体系に組み込まれている最初の学校です。

平成29年3月に公示された幼稚園教育要領では、

- ①育みたい資質・能力の明確化
 - ②小学校教育との円滑な接続
 - ③現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し（預かり保育や子育て支援 等）
- の3つが、改訂のポイントになっています。

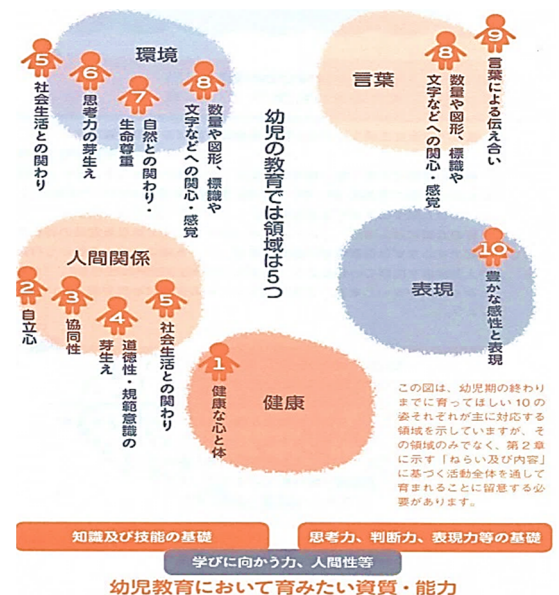
幼児教育において育む資質・能力は、「**知識及び技能の基礎**」「**思考力、判断力、表現力等の基礎**」「**学びに向かう力、人間性等**」の3つで、小学校以上の学校で育みたい力と変わりませんが、幼稚園では、子供の発達を「**健康**」「**人間関係**」「**環境**」「**言葉**」「**表現**」という5つの側面（5領域）から捉えています。

幼稚園と小中学校は同じ学校でありながら、

- ・5領域の内容を総合的に学ぶ幼稚園－教科等の学習内容を系統的に学ぶ小中学校
- ・子供の生活リズムに合わせた幼稚園－時間割に合わせた小中学校
- ・身の回りの「**人ものこと**」が教材の幼稚園－教科書が主たる教材の小中学校等

大きな違いがあります。そこで、子供たちが新しい学校生活に円滑に移行していくために、「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」が、今回の指導要領改訂で示されました。これは、5領域という分類を使わない小学校に幼児の姿を伝えやすくするためです。「姿」というのは、様々な活動の中で表れる子供の様子を具体的に示したもので、それぞれを別個に取り出して指導するものではありませんし、到達すべき目標でもありません。

幼児教育において育みたい資質・能力及び「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」を幼小の教師が共有し、それぞれの教育に生かしていけるよう、意見交換をしたり合同の研修会などを開いたりする取り組みが連携であり、円滑な接続に繋がると思います。（「市2年次研修会異校種交流」会場富岡第一幼稚園 藪下亮治園長講話より）



「市2・3年目研修会」

市2・3年目研修会が西中で開催され、中2国語「高名の木登り」(徒然草)の授業が公開されました。古典の文章には、主語が省略されている場合が多く、誰が登場しているのか見つけにくい時があります。本時は、まさにそういう場面でした。手立てとして、途中、先生がタイミングよくヒントを与えていました。参観した先生方は、生徒や授業者の発言をきっちり聞き取ることを意識して、授業記録を執りながら授業に臨みました。以下、一つのグループが登場人物が誰かを捉え、その関係に気付くところまでの過程を紹介します。

G:「高名の木登りという人がいるよ」

O:「木の上にいるのが兼好法師かな」

(ここでは登場人物は2人であると理解していた)

G:「人をおきててだから、「人」をその場に置いて、名人が自分で木に登って枝を切ったんだ」

G:「軒丈とかって書いてあるから…」と言いながら、家の絵を描き始め、「もう一人、人がいて、外から見てるんじゃないかな」とつぶやく。

一迷っているところに、先生から全体へのヒントとして他班のYを指名—

『おきてて』は指図という意味だから、人に命令しているんだ。だから、登ったのは名人じゃない。(登場人物は3人であることに、ここで気付く)

O:「じゃ、兼好はどんなことしたの?名人じゃないいんでしょ?じゃ何?」

G:「外から見てるだけの人。」

先生:「本当に見てるだけなの?兼好は何した人なの?」 一略—

C:「『候』(そうろう)」って言われている。敬語かな。」

O:「『候』は、ございますって意味かな。」

先生:「『候』に目を付けたのはいいことだね。」

C:「『いかにかく言ふぞ』って偉そう。『そのことにそうろう』と、『過ちすな』と『いかにかく言ふぞ』は、言ってる人が違うって。」

G:「『かばかりになりては、飛び降りるとも降りなん。』このくらいになったら降りましょう。って意味かな。」

O:「降りられるのに、なんでそんなこと言うの?っていう意味。」

G:「名人が言うの?兼好が言うの?」

O:「兼好かな。名人が兼好に敬語を使ってるから、兼好の方が偉いと思う。」

A,K:「そういうこと~?!」

(イラストの位置関係や、敬語に着目をして身分の違いを理解した)



● 授業者から

今回の授業では生徒が本教材を読んでいくうえで躓くであろう「誰が」「どこで」「何を言っているか」の三点にポイントを置き、段階的に内容理解につなげていこうと考えた。結果としてイラストを用いることで本文を視覚的に捉え、読んでいく上での意見の食い違いを生徒同士の議論で解決し、また、ヒントを得ようと本文を何度も読み返している様子が見られて良かった。

● 学びの森 指導員から

古典への抵抗感をなくすため、授業者はイラストを使用し、文章に表れていない登場人物の存在に気付かせようと試みました。文字だけでは見えてこなかった人物に、イラストを通すことで出会うことができた生徒たち。また、既習内容を生かして、敬語に着目し、人物同士の関係性にまで思いを巡らせた生徒の姿に驚きました。あらすじを捉えた生徒は、次時に、兼好のメッセージを読み取っていきます。どんな思いを受け止められたのか、もう一度授業を参観したくなりました。

「2・3年目研修会」参加者の感想より

(生徒の言葉・つぶやきを)教員がどれだけ予想し、どのような言葉を返すか、どのような働きかけをするかによって、生徒の学びの深まりは変わってくると感じました。自分自身の授業に対する事前の準備を見直していきたいです。

“子供の立場に立って授業を考える”大切さを改めて感じる研修会でした。3年目教員を集めての研修会は終わります。同期と共に、これからも語り合い、支え合う仲間であってほしいと思います。

編集・発行: “学びの森”

〒410-1102

裾野市深良 435 番地

生涯学習センター2階

TEL: 055-995-4903

FAX: 055-995-4904